

<実践研究>

音楽とことばの交響

—学級文化の醸成における音楽科と国語科の連携—

| | |
|------|-----------------|
| 原 由佳 | 信州大学教育学部附属長野小学校 |
| 山浦光雄 | 信州大学教育学部附属長野小学校 |
| 清水 和 | 信州大学教育学部附属長野小学校 |
| 藤森裕治 | 信州大学学術研究院教育学系 |

キーワード：音楽科教育，国語科教育，交響，学級文化，行為の意味，葛藤と省察，分化と統合

1. 緒言

信州大学教育学部附属長野小学校（以下「長野小」）には、学級ごとに、年間を通じて取り組むテーマがある。テーマは動物飼育，植物栽培，ものづくり，芸術創作，学校行事，社会活動などから選択され，様々な教科学習や特別活動を結びつけながら，総合的・体験的な学びの中核として機能する。教師は子供とともに教室に在り，学び手の一人としてテーマを追究する。子供たちはテーマを共有し，失敗を恐れずに活動し，真摯に省察して学びの意味を確かめる。そこには「学び」を要素還元的・能力主義的に捉えるのではなく，生涯にわたって行うべき全人的・協働的な行為として捉える基本哲学がある。

長野小では，第6学年の7月に新潟県の谷浜海岸で二泊三日を過ごし，すべての児童が遠泳に挑む伝統行事（谷浜鍛錬会）がある。これもまた，長野小で取り組み続けるテーマの一つである。子供たちは鍛錬会の2週間前からプールで水錬に励み，困難な目標に挑戦することの意味を考え，精神力を鍛冶する。この行事の意義は，仲間たちと支え合いながら，個々の子供が自力で泳ぎ切ろうとするとところに置かれている。

平成27年7月15日，この年もまた，第6学年（以下「6年」）は谷浜鍛錬会に出かけた。ところが日本海は台風の接近によって大時化となり，子供たちは3日間のうち初日しか海に入ることができず，これまでの鍛錬の成果を身体で確かめることなく帰途につくことを余儀なくされた。この経験は，2学期以降の学びに深い影響を与えていく。

プールで苦しい遠泳に打ち込んだ日々の成果を確かめる場を得ることができなかった事態，すなわち努力が報われなかったという事態は，一つの挫折経験として6年の子供たちに記憶されている。2学期，子供たちは学校生活の折々に谷浜で泳げなかったことを思い出し，それぞれの学びをこれに繋げていった。例えば，運動会の組体操では全員で谷浜海岸に寄せた荒波を表現し，戦争について考える社会科の学習では荒れる海を見つめながら25分間の作文に向かった谷浜での経験が引き合いにされた。彼らはそうして，挫折を新たな学びの「材」に換えていった。

11月17日，ホクト文化ホールで長野上水内小学校合同音楽会（以下「音楽会」）が開催された。この行事もまた，谷浜での挫折経験と深い関わりを持っている。選ばれた合唱曲の歌詞には挫折や苦悩，不安を乗り越え，生きることの喜び，愛と平和への祈りが歌い込まれており，子供たちにとって深いメッセージを伝えていた。子供たちは，学年全体合唱という音楽科の活動を通して，また，歌詞の解釈という国語科の学びを通して音楽会に臨んでいく。背景には如上の谷浜での三日間があった。

本稿は、音楽会への取り組みの中で、音楽科と国語科の授業がどのように「交響」すなわち一つの目標達成に向けて調和的・共創的に関わり合い、それを通して6年の学級文化がどのように成熟していったのかについての省察的実践報告である。

2. 教科横断型カリキュラムとしての音楽科と国語科の協働

2.1. 先行実践研究の概観

音楽科と国語科の教科間連携にかかる先駆的な実践研究には中地(1995)がある。氏は、オーストリアにおける音楽科とドイツ語科の合科的指導について調査し、「音・動き・ことば」の三局面が連携・融合し合う学びとして展開する同国の教科構造を報告している。中地の研究は上谷・中地(1998)で実践化され、宮沢賢治「やまなし」の朗読に際して作品の内容にふさわしい音響やメロディを添える試みが示されている。その成果として、国語科教育における読者論・群読の知見と音楽科教育における創作との間に、合科的アプローチを展開する際の関連性が示唆されている(p.56)。

日吉(2009)は、音楽科教育における合唱指導の一私案として「詩のボクシング」と呼ばれる朗読活動を取り入れた歌詞指導を報告している。氏は中学1年生の選択教科における歌詞指導の一環として朗読活動を位置づけた。その結果、歌詞についての感じ方やとらえ方を深め、合唱に対する関心意欲を高めるのに有効だったという結論を示している。

安中(2011)は、小学3年生を対象にして、詩の音読にリズムを付けて表現する実践を報告している。実践を通して、安中は個と集団における協働的な学びの場が形成されること、「聴くこと」を起点とした表現と鑑賞の関連性が促進されること、身体表現の価値や意義が自覚されることなどを指摘している。一方、リズムや強弱に子供の意識を向かわせすぎると、学びが要素主義的に陥る危険性も示唆している。

西田・今道(2011)は、小学校4年生を対象にして、「風」を五感で感じたイメージを音楽科と国語科とで表現する単元を構想し、実践的検証を行っている。西田らによれば、子供たちが自信を持って心から感じたことを表すためには、①対象をじっくりと感じ取ること、②表現を受け容れる経験を持つことが重要であることが示唆されている。

山田・都築(2015)では、小学校段階における国語科・音楽科の合科的指導が音楽科の指導事項習得にもたらす効果が検討されている。山田らによれば、国語科に音楽科の要素を取り入れた授業では、「速さ」「リズム」の理解に有意差が見られたが、音楽科に国語科を取り入れた授業では有意差は現れなかった。また、意欲関心面では前者が「速さ」「強弱」、後者が「リズム」により向けられることが示唆されている。

2.2. 本実践報告の独自性

以上のように、音楽科と国語科の教科間連携は、学習者に音楽と言語表現との分ちがたい関係性を自覚させ、対象認識や表現活動に際しての関心意欲を高めることがうかがわれる。その際、二つの教科をどのような中核的教育内容、言い換えれば軸をもって関わらせるかについては課題が残されている。

本実践報告は、先行研究が示したこの課題について、これまでにないアプローチを提示する。それは、音楽科と国語科とを結ぶ軸に、当該学級が全体で追究してきたテーマを据えるというアプローチである。先行研究の中心的課題は音楽科と国語科の連携はいかに可能かという問いにあるが、なぜその対象として当該学級が選ばれる必然性があったかについての言及はなく、どのような出来事や人間関係の推移、いわば「物語」があったのかを踏まえた報告は皆無である。しかしながら、教科間連携

が目指す全人的・総合的・統合的な学びにとって、学習者や学級のプロフィールを基盤に据えることは必須の要件と考える。創作的・表現的な教育活動には、学習者の身体に埋め込まれた経験との関わりが欠かせないからである。また、学習者や学級にとって様々な教育活動は、すべて当人及び当該共同体における全一的な学びとしての経験だからである。

2.3. 目的と方法

目的：学級が全体で取り組んだテーマ、抱えてきた課題を軸に据え、それに対する追究を目指した音楽科・国語科の教科間連携の実践過程を記述することにより、かかる実践的アプローチがもたらす教育的意義と課題について分析・考察すること。

方法：音楽科担当教員（原）、学年担任（山浦・清水）を実践当事者とし、それぞれの立場から指導・観察・把握した当該学級の実践過程を、主観性を排除しない一連の「物語」として省察的に記述する(マーネン, 1999; 鯨岡, 2006)。ここに実践過程を外部から観察する共同研究者(藤森)を交え、記述内容の連関性と教育的意義・課題とを考察する。

2.4. 環境情報

対象：6年1組・2組の学習者計80名

期間：2015年9月～11月

作品：少年少女のための合唱組曲『わたしが呼吸するとき』第5曲(坂田江美作詞・吉田峰明作曲, 2004年, 音楽之友社)

歌詞を以下に引用する。

何もかも わからなくて
胸の中 おしよせる いらだち
この小さな手で 何が できるだろう？
だけど……
わたしが呼吸するとき 星は光り
森のけものたちは 寝返りをうつ
走り出す しまうまの群れ
飛び立つ フラミンゴ
オーロラは躍る 蛍またたき
あなたが わらう
ああ いつも いつも
わたしたちは つながっている
夜空にかがやく 星座の衣につつまれて
すべてのものを見たい
すべてを知りたい
すべてを感じ わかりたい
見たことのないもの
逢ったことのない人々
よろこび かなしみ
すべてが いとおしい
だから
星に向かつて 言おう
わたしたち この世界を
平和にだつてできる
あなたが望めば ほんとうになる
わたしが望めば ほんとうにできる
愛と平和
あなたと わたし

3. 6年担任による実践の軌跡と省察

本節では、6年の担任が経験した本実践の経過と省察内容とを、当事者の一人である山浦の「語り」という形式で提示する。

3.1. 鍛錬会から音楽会の曲選びへ

2015年7月、子供たちは谷浜の海で25分間を泳ぎきることを目指し、2週間泳ぎ続けてきた。泳ぎ始めてすぐに立ってしまっていた子も、自分と闘い、長い時間泳げるようになった。自分のペースで泳いで前後の子とぶつかってしまっていた子も、友とペースを合わせ、1つの輪の中で泳げるようになった。やがて全員が呼吸を合わせて泳げるようになり、その実感を「みんなの心が1つになってきた」と言い表していた。

本番の谷浜。1日目は海で泳げたものの、2日目、3日目は台風接近のため高波が押し寄せ、海で

泳ぐことは叶わなかった。子供たちは泳ぐはずだった 25 分間、谷浜での思いを原稿用紙に綴った。「自然の力には勝てない」と、自分の力ではどうすることもできない壁に当たった無念さ、悔しさを綴る子供たちがいる中で、「海で泳げなかったけれど、泳げなかった海を見ながら綴ることで、谷浜で学んだこと、谷浜鍛錬会の意味を見つけることができた」と記した子がいた。思うに任せない状況に立たされたからこそ、自分が向かい合ってきた出来事に別の意味合いを見出していたのである。

2 学期を迎えるにあたり、担任団は次のように語り合った。

「鍛錬会はこの子たちにとって大きな経験だった。ここから先、子供たちが育つ大きな行事が続く。9 月に運動会での組体操。11 月には合同音楽会。組体操では、この子たちは、しっかり向き合ってさらに成長する気がする。谷浜と同じく『身体』の世界、耐える世界だからだ。問題は合同音楽会だ。合唱という繊細な世界、自分を『ひらく』必要がある世界。ここで子供たちが歌を通して自分をひらき、『谷浜』と同じ『みんなと一つになる』ことが体感できるか。そこがカギだと思う」。

音楽会の曲選びでは、音楽専科の原と担任の清水・山浦とで何曲かを聴き比べた。その結果、『わたしが呼吸するとき』と、「センスオブワンダー」の 2 曲が選ばれた。『わたしが呼吸するとき』は物語のような歌で、自分が呼吸した一瞬に、世界ではどんな事が起こっているかに思いをはせる曲である。一方の「センスオブワンダー」は抽象的、象徴的な歌詞が並び、音や歌詞の重なりによって世界や地球の生き生きとした様子が表されている。選択は子供たちに委ねた。最初、票は 2 つに割れたが、繰り返し聴くうち、子供たちは『わたしが呼吸するとき』に惹かれていった。

3.2. 音楽会に向けた学年練習

学年の練習が始まった。原はパート練習をあまりしない。全員で合唱しながら各パートの音をとっていく。各パートの音の重なりを感じながら、自分のパートの音を掴んでいく。歌のポイントとなる部分を取り出し、何度も歌い込む練習を大切にしていた。歌い出しの「何もかも」は息を吸い、一瞬で歌う。教師が実際に「すっ」と息を吸い、「なにもかも……」と歌い出す所を何度も歌って見せながら、繰り返しその部分を歌った。歌い出しが、緊張感のあるものに変わっていった。

10 月下旬、練習会場が音楽室からランチルームに移された。天井が高く、声の響くランチルームに出たことで、子供たちは伸びやかに、気持ちよさそうに歌った。「毎年ランチルームに出ると響くから気持ちよく歌えるようになるんです」これまでの経験から、原はそう話した。

日に日に歌うことが気持ちよくなっていく様子の子供たちがいる一方で、気になる様子の子供たちがいた。全員が歌っている最中でも隣の子とおしゃべりをしている子。ほとんど口を動かさずにいる子。この子たちはどういう心持ちであの場にいるのだろうか。担任自身は小さい頃から合唱が好きで、歌うことは自分にとって気持ちのいいこと、自分が解放されていくことだったせいか、「歌わない」子の気持ちが、本当のところはよくわからない。これまでなら、「みんな歌っているから歌おう」、 「何をしにここへ来ているの？」などと、直接的にその子たちに声をかけていたと思う。そして、無理矢理「歌わせて」いただろう。しかしこの練習では、「この子たちが歌に入り込まない、あるいは入り込めない理由が何かあるのかも知れない」と立ち止まって考えていた。どうしたらこの子たちの心の中に歌への火が灯るのか。考えながら、その子たちの様子をみながら、一人の歌い手として練習に参加していた。

本番が近づき、体育館練習に入った。それでもまだ、歌に入り込んでいない様子の子がいた。さすがに担任の我々も焦ってきた。子供たちの中にも、「パートの中で歌ってくれない人がいる。このままだとみんなで歌う歌にならない」と訴えたり、相談に来たりする子がいた。

どうしたらよいのか…。その時、あの鍛錬会でのことが頭の中に浮かんできた。谷浜へのあの子供

たちの向かい方、そして泳げなかった時、嘆くのではなく、海を見ながらひたすら綴っていた子供たちの姿。綴りながら谷浜鍛錬会の「意味」を探していた子供たち。では、この子たちにとって、この『わたしが呼吸するとき』という歌は、どのような意味をもっているのだろうか。

3.3. 国語科の学びとして歌詞を読む

そのことを考える中で、国語科の詩の授業としてこの曲の歌詞を1時間扱ったらどうか、子供たちの中で何かが変わるのではないかという着想を得た。

11月5日、特設の国語の授業として、子供たちと『わたしが呼吸するとき』の歌詞を読み、「自分が一番大切に歌いたいところ」を語り合った。そして、授業の最後に作詞者の坂田江美がこの歌に託した思いの書かれたプリントを読み合わせた。坂田は「子供たちに、愛と平和を呼びかけられたらどんなにすてきだろう。私が望めばそれができるのではないか」と書いていた。この授業を行った次の時間、学年全体で歌う練習を行った。子供たちは以下のように振り返っている（抜粋）。

- ・今日、朝の時間に歌った時は声が小さくて「あれー、昨日と全然違う」と思ったけれど、5時間目に坂田江美さんがこの歌の詩に込めた思いを考えたり、大切に歌いたい所などを語り合ったりしてから6時間目に歌ったら、昨日よりもっといいハーモニーができて、とてもきれいな歌声が体育館に響き渡りました。
- ・今日は5時間目に詩の意味を考えてから歌った。みんなそれぞれ違う考えを持っていていいと思った。なぜならそっちの方が一人一人の個性が出るからです。
- ・今日、歌詞の意味を考えた後歌ったら、いつもよりステップアップしたように感じました。例えば「(寝返りを) うつ」の部分が透き通っていて、サッパリしていて、なんか気持ちよくなりました。
- ・今日、私は大切にしたい所がわかった気がします。「この小さな手で何ができるだろう」は谷浜につながるからです。大切に歌いたいです。
- ・私は歌ってみて、大切に歌いたい場所を考えることができました。振り返りで話したように、「私たち この世界を 平和にだってできる」の場所を大切に歌いたいです。

子供たちの振り返り、そして歌声から、「自分が大切に歌いたいところ」を意識しながら歌い始めたことが感じられた。音楽専科の原から、学級単位で「大切に歌いたいところ」を実際に歌にして表しながら聴き合い、それをもう1つの学級も同じように歌ってみるという練習が示された。子供たちは相手の学級の演奏を興味津々に聴いていた。そして、互いの学級の思いと表現を取り入れ、表現に繋げていった。歌の表情が劇的に変わった。「自分にとって」大切な部分という所に、大きな意味があるのだと改めて思った。

3.4. 歌うことの意味を問う

11月12日、音楽会5日前。全校の前で演奏する機会を得た。子供たちの歌声を聴き、表情を見ながら、「まだ何か足りない」、「この子たちならもっと歌えるはず」と感じていた。歌詞をじっくりと見返しながら自分が大切に歌いたい場所を決め、作詞者の思いにも触れながら練習してきた。声がそろい、美しい歌声にはなっていた。でも、まだ何か足りない。もっとよくなる気がする。

何をどうしていけばよいのか。やはり、「意味」を探究することなのではないかと思った。国語科の詩の授業で見つめ始めた歌詞の意味をさらに細かく見つめていく必要があるのではないか。そして「自分が一番大切に歌いたい部分」から「そもそも自分がこの歌を歌うことの意味は何なのか」という層まで掘り下げてみる必要があるのではないか。谷浜の時、子供たちが自問していた「海で泳ぐことの意味」、「プールで泳ぎ込んできたことの意味」と同じである。この子たちはその活動が「自分に

とって意味あること」と思えたとき、生き生きとし始める。このことは、谷浜のみならず、2年半を一緒に過ごす中で何度も感じてきたことだった。

歌詞の中に入り込み、「歌う意味」を子供たちが持てるような活動をいくつか考えてみた。谷浜に向き合い、「意味」を求めてきた子供たち。この子たちならいけるはずだ。音楽科と担任団で話し合いの場をもった。その中で、原から1つの提案が示された。組曲『わたしが呼吸するとき』第4曲、『耳を澄ませば』を聴けば『わたしが呼吸するとき』とのつながりがわかるかも知れない。曲を聴いた。「これだ!」と思った。その歌詞の内容は、耳をふさぎたくなるような、暗く、痛ましく、切ない内容だった。戦争で手足を奪われた人の叫びだった。「手を返せ 足を返せ」。この歌詞を聴きながら、そうした人の姿が自分の目の前にはっきりと浮かび上がってきた。子供たちは、この『耳を澄ませば』を聴けば、歌詞の情景をありありと目の前に浮かべられるだろう。そして、『わたしが呼吸するとき』の冒頭部分にある「何もかもわからなくて……小さな手で 何ができるだろう」とは何が「分からない」のか、なぜ「いらだって」いるのか、なぜ「何ができるだろう」と戸惑っているのかを諒解できるだろう。そして、最後の歌詞「愛と平和」に込められた願いがわかるだろう、そう思った。

6年全員が学習センターに集まった。原が『耳を澄ませば』の曲を流した。学習センターが静まり返った。顔をゆがめて聴く子、曲のおどろおどろしさに圧倒された表情の子がいた。『耳を澄ませば』を聴いて感じたことを語り合った当日の振り返りは次のようなものだった(抜粋)。

- ・今日、『耳を澄ませば』を聴きました。今まで、どういう平和で、どういう苦しみかあまり深くわかりませんでした。この曲を聴いて全てがわかりました。
- ・『耳を澄ませば』を聴いた。やっぱり戦争のことだと思った。だから平和を保ちたい。それを意識して歌いたい。
- ・「耳を澄ませば」を聴きました。なんかつながっているなーと思いました。『わたしが呼吸するとき』は、自分が呼吸するその瞬間にも、世の中では喜んでる人、苦しんでいる人がいるんだってことかなって思った。
- ・『耳を澄ませば』を聴いて『わたしが呼吸するとき』の「いらだち」の意味がわかったような気がします。「いらだち」は自分の親などを奪われた怒りみたいな感じがします。
- ・『耳を澄ませば』を聴いて、本当に悲惨な状態が目の前に浮かんできました。戦争のことで、2曲のつながりを感じました。それは、戦争→平和のつながりです。『わたしが呼吸するとき』の最初の「何もかもわからなくて」に注目して、このことは、戦争でもうまわりがごちゃごちゃして何も考えられないし、何が起きているのかもわからない、本当にそんな周りの状態を言っているのだと思います。最後の「だから」から、平和を祈っているのだと思います。聴いている人には「平和への祈り」というものを受け取ってほしいし、それが伝わるといいです。

『耳を澄ませば』を聴き、感じたことを語り合った後で、子供たちは『わたしが呼吸するとき』を合唱した。聴いていると、自然と涙が出てきた。今までとは何かが違う。心に訴えてくるものがある。「この子たちの心の中に歌のあらかず情景が描き出されながら、この子たちは歌っている」、そういう感覚があった。と共に、子供たちと一緒に歌いながら、この歌の意味を実感し、この歌に涙している担任としての自分がいた。「そういうことだったのか。そういうことが言いたかったのか」。「愛と平和、ほんとだな。愛と平和、その中にあなたと私がいる。あなたと私から愛と平和が生まれる」歌詞の意味を実感しながら、かみしめながら歌っていたのだった。

3.5. 共感するということ

11月17日、ホクト文化ホールでの音楽会当日。子供たちは緊張の面持ちでステージに向かった。

音楽とことばの交響

緊張のためか、歌い出しはやや小さく聴こえた。しかし、曲が進むうち、いつもの抑揚のある歌、緩急のある歌になってきた。「歌詞がよく聴こえてくる」、「歌詞が胸に届いてくる」、「訴えてくるものがある」、そういう感じがした。最後の部分、「愛と平和 あなたと わたし」の語尾にある「し」が伸びやかに響き、演奏が終わった。

演奏後、講師の先生から以下のような講評をいただいた。

細かな歌詞も大変ていねいに発音されていて、曲への共感の深さが感じられ(ママ)ます。難しい曲をよく歌いこなして感心しました。場面による表現の違いも意識されていて、構成としてのもまとももよくできています。練習の成果がステージで発揮されましたね。

「曲への共感の深さ」。この合同音楽会に向けての歌づくりは、「歌の中に入り込み、『そういうことを表している歌詞なのか』と発見し、共感していった営みであったのだ」と思った。「共感」をさらに言いかえるならば、この子たちにとってのこの歌詞の意味、そして、この子たちがこの歌を歌う意味を探し続けた営みであったともいえるだろう。歌いながら歌詞の意味を考え、それをどう表現するか試し、形にしてきた。歌詞を詩としてじっくりと味わいなおし、自分が一番大切に歌いたい部分を自分の中ではっきりとさせ、作詞者の込めた思いに触れた。さらに、組曲の1つ前の曲『耳を澄ませば』を聴き、『わたしが呼吸するとき』は、戦争での辛さ、切なさ、失われた命の上に立って描かれた、命への賛歌であったことがわかった。こうした営みの中で、歌詞にあらわされている世界と、子供の心の中の世界が繋がり、重なり合っていたのである。

学び全体を通して、子供たちは次のような振り返りを寄せている(抜粋)。

- ・最初の練習との時は正直歌がまともならず、全然いい歌にはなっていませんでした。だけど、練習していく度に、友の声を意識してみんなで歌をよくしていきました。『耳を澄ませば』を聴いたり、『わたしが呼吸するとき』の詩を読んだりして、意味を考えたことで本番みんながより深く歌えたと、今までで一番よかったと思いました。緊張したけれど、精一杯歌えて悔いのない合同音楽会だったと思いました。
- ・だんだんみんなの緊張がほぐれてきて、強弱がたくさんついてきました。最後の「あなたが望めば本当になる 私が望めば本当にできる 愛と平和 あなたと私」の所で精一杯出し切れて、達成感と気持ちよさ、それと同時に今までがんばってきたのが一気に終わってしまったという悲しさが出てきました。でもみんなのベストが尽くせたと思うし、とてもすてきな合唱がこの合同音楽会でできたからよかった。そして、谷浜の時のようにみんなの心が1つになったと思った。とてもうれしかった。
- ・私は合同音楽会を終えて、私的にはすっかりして、気持ちよく歌えたと思います。隣の人と息を吸うタイミングを合わせて、「なにかも」からちゃんと歌い出せました。最初、顔の表情のこととか忘れていたけど、「だけど」の所で原先生が笑顔になったから私も一緒に笑顔にできました。それで、平和の歌だということを思い出したら、(授業で見た)「はだしのゲン」のこととか、聴いた戦争の話とかがよみがえってきました。そして最後の「だから空に向かって」の所は平和を願って、みんなの幸せを願って歌うことができました。みんなで気持ちよく歌えて本当に良かったです。あと残りの時間、この仲間と過ごす時間を大切にしようと思いました。

4. 音楽専科教員による実践の軌跡と省察

本節では、音楽専科教員が経験した本実践の経過と省察内容のうち、特に歌詞の理解とのかかわりに関連する部分を当事者である原の「語り」という形式で提示する(児童名はすべて仮名)。

4.1. 音楽は自由なものであるべきだ

合唱練習で「音とり」をしていたときのことだ。知也は、聞こえてくる他のパートに惑わされずに自分のパートを歌っていくということが難しい。しかし、知也は全てのパートを気持ちよさそうに歌う。ソプラノの正しい音程を歌えるように知也に働きかけるうち、知也は、いつもの気持ちよさそうな歌い方ではなくなっていく。そんな様子を感じたからだろうか、光樹は「音楽は自由なものだから楽しいのに。音楽はもっと自由なものであるべきだ」と言った。光樹の言葉に、たしかにそうだろうなずける部分はあったものの、音楽の楽しさはそのにあるだろうか、音楽の自由とは何か、自由はでたらめと何が違うのかといった問いに、改めて立ち止まっている自分がいた。そして、こんな知也や光樹たちとだからこそ、仲間と合わせて歌うことができたときの一体感や、音がきれいに重なり合った時に生まれるハーモニーの中にある心地よさを味わいたいのだという思いがこみ上げてきた。私がこの子たちと合唱をする意味がこの出来事を通して見えてきた。

4.2. 「合わせる」、最高だった！

初めて合わせた日は、出だしの「何もかも分からなくて」しか歌わなかった。初めて全体で合わせるとあって、学年全員が集合した音楽室は、騒がしかった。しかし、歌いだしの「な」の音を全員で同時に発声し、しかも、「何もかも分からない」という心情を表す音を意識して響かせるということをするうちに、次第に張り詰めたような緊張感が漂うようになっていった。ソプラノとアルトに分かれて互いに聴きあい、タイミングのずれや響きの違いを自分たちの耳で確かめていったからだろうか、子供たちが歌に思いを込め始めていく手応えがあった。音楽日記には次のように綴られていた。

- ・「何もかも」についてたくさん考えました。ただの一言なのに、考え続けると、とても難しかったです。そして、一番大変なのが、「みんなと合わせる」ことです。少しのばすと、きれい。切ると、きれい…など、いろいろな使い方が、また違う感じで、とてもきれいでした。
- ・となりに〇〇君がいて、めっちゃ声がきこえた。ときどき、〇〇君と近くの人の声がビリビリしててきれいだった。「何もかも」は、とてもきれいだけど、ほかはそろっていないから、次からがんばりたい。でも、今日は気持ちよく歌えたからよかった。
- ・今日は「合わせる」を意識して、練習しました。出だし、タイミングをそろえることを主に練習しました。なかなかうまく合わせることができなかつたけど、後の方でだんだん合わせられました。私は、声を「合わせる」のではなく、心も「合わせる」ことができれば、さらに良くなると思います。もっとこだわられる所をさらにこだわっていきたいです。

教師は「合わせる」、「サイレンス」をキーワードに、ひたすら技能面のことを取り上げていた。その中で、子供たちは隣の友と高め合える関係を築き始めていた。佳晴は光太の隣に立ち、歌っていた。二人の体は次第にシンクロしていくようだった。その中で感じた心地よさからか、佳晴の音楽日記には『「合わせる」最高だった！最後すごくきれいだった！』と感動した気持ちが綴られていた。

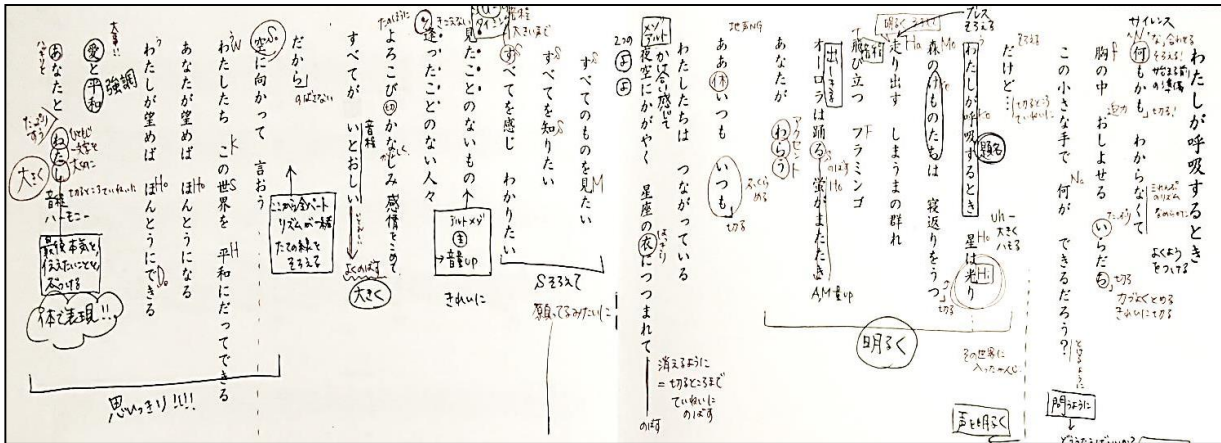
次の時間は「休符」を手がかりに授業をしようと思っていた。「なにもかも」のたった一言の歌い方を考え抜いていくことで、どんどん集中していく子供たちを感じていたからだ。次の「わからなくて」「いらだち」など、この部分にはたくさんの休符がある。それらが揃うことは、子供たちの集中力を高め、一体感の中で歌うことの気持ちよさを味わうことにつながることを予感していた。子供たちと実際に休符を合わせようと何度も繰り返し歌ううち、私は、「わからなくて」の16分休符は単に合わせにくいのではなく、「私」の切迫感のある思いを表しているのではないかと感じ始めていた。絶望感がわっと溢れ出てきたような「何もかも」のフレーズ。そして、「何もかも」どうなのかという部分が休符を伴った「わからなくて」で明らかになる。本物の言葉を発するとき、人は饒舌には語れないの

だという。この休符には、絞り出すようにして語り始めた「私」の本当の思いが詰まっているのかもしれないと感じた。

「休符」の歌い方に意識を向けながら、「何もかも 分からなくて」をどんな音で表現したらよいか、子供たちも私自身も向かっていった。子供たちの歌声の変化から、何度も自分自身の楽曲への解釈が更新され、いつの間にか更新されることを楽しみに子供たちの前に立つ自分がいた。

4.3. 表現を工夫したい、抑揚をつけていきたい

練習が進むうちに、子供たちは「強弱を工夫していきたい」、「明るく歌うところと、暗く歌うところを考えてみたい」などと、自分がどのように表現したいのかを語り始めた。そこで、子供たちがどこをどう歌いたいのか語る場を設け、歌詞を印刷した模造紙に書き込む形で整理してみた（写真）。



子供たちは、自分がどのように歌いたいのかを語る際に、歌詞の意味についてもそれぞれの思いを抱いている。選曲した際に機を見てこの曲の歌詞を「詩」として取り上げ、「国語」で授業をすることを構想していたが、今がその時ではないかと感じた。

歌詞を読む授業は担任の山浦、清水がそれぞれの教室で行った。次のような意見が出された。

- ・この人は震災や戦争といった絶望感の中にいるのではないか。
- ・「見たことのないもの、逢ったこともない人々」という歌詞から「私」はまだ生まれていないのではないか。
- ・「この小さな手で何ができるだろう」という問いに対し、「私たちこの世界を平和にだってできる」と答えを出しているのではないか。

どれもなるほどと思わされる感じ方をしており、これを一つの表現にしていくことは至難の業のように感じられた。「表現を工夫するとはどういうことか。強弱などを一つの表現にそろえるということでのよいのか」という問いが生まれた。

そんな思いを抱えたまま6時間目に子供たちの前に立った。5時間目に詩の授業をしたばかりの子供たちは、いつもと少し違った様子でそこに立っていた。詩の授業で第1連と第2連の明暗について感じていた子供たち。始めに全体を通して歌う。その演奏を聴くと、既にこの明暗を歌い分け始めている。私は、「ここの部分(第2連)、中にはファンタジーのようだと感じた人もいるくらい、本当に美しい、見てみたい物が描かれているよね。これを音に表したらどうなるかな」、「それではこちら(第1連)に戻るよ」などと語りかけ、歌い分けへの意識を明確にしていただけでよかった。特に第1連の歌い方は鳥肌が立つ感覚を覚えたほどで、これまで「何もかも」を合わせることやテンポなどを正確にしていくことにとらわれていたところから一歩抜け出した。子供たちにも、感嘆のため息混じりの、何とも言えない表情が生まれていた。

4.4. 本気で歌えた幸せ。私は一生忘れない

詩の授業の日の放課後、担任の山浦から次のような相談があった。「この子たちにはこうして自分たちで考えて音にあらわしていくというアプローチがいいのではないか。数日後に迫る本番を前に、もう一度このようなことはできないものか」。私自身もこの機会に第4曲の『耳を澄ませば』を聴いてみたいと思うが迷っていると伝え、一緒に話し合った。私はこの曲の存在は見逃せないと考えていたものの、ストレートすぎるほどの残酷な描写に、子供たちとこれを聴くべきかどうかためらっていた。それでも詩の授業の姿から見て、今の子供たちなら『耳を澄ませば』をしっかりと受け止めるはずだ。その可能性を信じて提示することにした。

子供たちはあまりのストレートさに「怖い」、「えー、残酷すぎる」と始めこそざわざわしていたが、曲が進むにつれてじっと聴き入っていった。曲が終わると、思わず隣の友と語り合いを始めていく。頃合いを見て、全体に話を広げると、順大が「この歌詞の子は死んでしまったのではないか。だから、『わたしが呼吸するとき』にはその子が見たかった物やことが入っている。呼吸しているということは生きていくということだ」と語った。この言葉に、「そうか、この曲は生きていくことの幸せも歌っているのだ」という意味に気がついた。『わたしが呼吸するとき』の解釈がまたひとつ深まった。

語り合いの後の歌は、「何もかも」のところから声が違った。私も子供たちとともに声を出してみる。涙が出そうなほど胸が苦しい。「走り出すしまうまの群れ」や「フラミンゴ」ではその迫力を思い、「あなたがわらう」のフレーズを歌うのが嬉しい。

『全ての物を見たい』とは戦争の世界では見るができなかった物」と順大は語った。そう思うと、これまで楽譜に書いてあるからフェルマータ(fermata)やrit(ritardando)といった記号をつけてきたが、間をたっぴり取って歌うことの意味が、音楽と共に私の体の中に入り込んでくるようだった。これまでどうしても速くなってしまっていた「だから」からは、勢いよくどんどん歌っていくことができなくなっていた。明らかに子供たちもいつもの勢いとは違った。けれども、嫌ではない、どの子も、この深刻なメッセージを受け取るように、かみしめるように歌っていたのだった。

この曲をこの子たちと歌う意味とは何か。今、私たちが、平和な世界に生きる私たちがこの歌を歌う意味とは何か。私にとってこの歌を歌うということはどんな意味を持つのか。声を合わせて歌う「合唱」とは、音にのせて1つの詞を唱えることだ。仲間と唱える。互いにこの詞から感じることは違いますが、共に同じ詞を唱える。平和を祈るこの歌。まるで、祈りを込めていくかのような音楽である。その詞を大人数で唱える。遙香は音楽日記に「本気で歌えた幸せ。私は一生忘れない」と綴っていた。私たちはこの歌を共に歌うことで、ある決意をしているのかも知れない。平和をずっと守り続けていく私たちになるために、みんなとこの詞を歌うのかもしれない。今呼吸するこの一瞬にも世界ではいろんなことが起こっていて、喜んでいる人も苦しんでいる人もいる。だから、今を大事に歌う、今生きる私たちの歌なのだ。子供たちは音楽日記にこう綴っている(抜粋)。

- ・『わたしが呼吸するとき』の「uー」は、その子が一番聴きたい音だったと思う。「uー」は、平和の音だと思う。その子はこの歌にのせて「平和を見たかった」、「戦争は絶対にしないで」と伝えているのだと思う。『耳を澄ませば』を聴いて、もっとこの歌を大切にしたいと思った。
- ・『耳を澄ませば』を聴いて、『わたしが呼吸するとき』を歌って私はハミングのところが平和な世界だと思いました。歌う気持ちが変わったからがんばりたい。平和な世界ができるといい。作ってみたい!
- ・『耳を澄ませば』を聴いて、僕は「あなたがわらう」をしっかり歌いたいです。なぜなら、『耳を澄ませば』で戦争を経験した人は誰かの笑顔を見たかったからです。

本番のステージはあっという間だった。練習で積み上げたものを「合わせて」歌うことができるたびに、緊張がほどけ、共にステージに立つ今を楽しむ事ができていくようだった。これまで、一人一人がこの曲から感じ取ったことをもとに表現を考え合ってきた。最後はそれらを持った一人一人が、それぞれ一人で立ち、共につくりあげてきたものを私のものとして表しきる。「一人で立ち」ながら「みんなとひとりになる」のだ。指揮者として共にステージに立つ私は、子供と共に迷い、解釈や表現の可能性を共に模索する一人として共に在りたいと思った。

5. 抽出児童における学びの軌跡

本節では、当該実践がどのような経験として意味付けられていったのかを、抽出児童の担任である清水の「語り」という形式で提示する（児童名はすべて仮名）。

5.1. 音楽会に向かう幸介の葛藤

児童会の副会長を務める幸介は、何事にも積極的に取り組み、また合唱にも前向きに取り組んできた。ソプラノでは最前列で仲の良い宏明と響き合いながら歌声を高めてきていた。そんな幸介であったが、音楽会直前に校内で行われた「6年生の合唱を聴く会」で緊張のあまり、いつものように声が出なくなってしまったのである。その日の振り返りで、幸介は次のように綴っている。

- ・今日、言われていたことが全然できなかった。自分でも、「ちゃんと声を出そう」と思っていたも、きんちょうで全然できなかった。今まで普通に出していた声が全然でなかった。今まで何をしてきたんだろう。初めて人前で歌い、自分の無力さがわかった。でもこれはある意味「チャンス」だと思う。人前で歌うことを一回経験したから本番は、もっと大きな声を出す。やってきたことをきちんとやる。

幸介がこのような挫折感を抱く中で、組曲『わたしが呼吸するとき』の『耳を澄ませば』を聴いた。『耳を澄ませば』を聴いた後、幸介は次のように振り返っている(4.4.引用部再掲)。

- ・『わたしが呼吸するとき』の「uー」は、その子が一番聴きたい音だったと思う。「uー」は、平和の音だと思う。その子はこの歌にのせて「平和を見たかった」、「戦争は絶対にしないで」と伝えているのだと思う。『耳を澄ませば』を聴いて、もっとこの歌を大切にしたいと思った。

これまで歌詞の意味については深く考えていなかった幸介が、このとき初めて「平和」、「戦争」という言葉に言及していた。幸介の中で歌にある言葉と「平和」、「戦争」とを結びつけて考え始めた瞬間だった。その後の練習で、幸介は「歌に色が出てきた」と振り返っている。音に乗せていた「ただの言葉」が「意味のある言葉」に変わっていったことで、幸介は歌に色を感じたに違いない。

音楽会を終え、幸介は次のように綴った。

- ・ステージに立つととても体が熱くなった。緊張して体が熱くなったのではなく、とてもリラックスして体が熱くなったのだ。ステージで歌った『わたしが呼吸するとき』は今まで練習で歌ってきた歌よりとてもきれいでとても力強く歌えた。本番で緊張してガチガチになってしまうだろうと思っていたが、とてもすがすがしく歌えた。最初に歌ったのは9月7日。そこからすべて通して歌ったのは9月28日。9月28日の歌声と11月17日の歌声ではぜんぜんちがう。僕たちはずっと詩の意味を考え、強弱をずっと考えてきた。とても難しい曲だったが、すべて通すと、とても気持ちよい歌になっていた。初めて人前に出たとき、とても緊張して歌うことができなかった。でもそこからレベルアップしていった。一日一歩だったのに、一日三歩、四歩と進んでいた。僕は思う。「一回失敗しないと大きな成長にはつながっていかないんだな」。僕は人前で歌えないという大きな失敗があったから大きな成長ができたのだと思う。

5.2. 校内音楽会に向けて

11月の音楽会を終えて3か月後、校内音楽会(2月19日)に向けて再び『わたしが呼吸するとき』の練習が始まった。11月以降、まだ一度も学年で合わせて歌っていない。1組担任の山浦と相談し、まずは11月の合同音楽会の合唱(VTR)を聴き直し、それをもとに最後の音楽会での合唱をどんな合唱にしたいか語り合う中で、気持ちを新たにしていけるような機会を設けることにした。当時は「気持ちよく歌えた」と振り返っていた幸介だったが、改めて音楽会の映像を見ると、「ちょっとずれているところがある」、「出だしがそろってない」等、課題を見出していった。そして、「最後の音楽会だから、集大成となる合唱にしたい」と目標を新たにしていっていった。

11月の合唱を視聴した翌日、3か月ぶりに学年で合わせて歌った。完璧とまではいかないものの、子供たちは思った以上に歌うことができていた。その後も、各学級で合唱の練習が進んでいった。しかし、音楽会に向けて合唱に向き合ってきた頃のような、子供たちの中から沸々とこみ上げてくるものがない。担任団と原とで相談し、再度歌詞に出会い、新たに感じることを、今だから感じることを考え合う時間をとることにした。

2組では音楽会の前日に改めて歌詞について考える授業が行われた。初めに歌詞を朗読し、改めて気づいたことや疑問に感じることを出し合った。

「『オーロラは踊る 蛍またたき あなたが笑う』という部分、作詞者はどんなことをイメージしていたのかな?」、「『私が望めば本当にできる』っていうけど、何を本当にしたいんだろう、本当にできるのだろうか」など、いくつかの疑問が上がった。幸介は、「『すべてのものを見たい すべてを知りたい すべてを感じわかりたい』っていうけど、どうしてそんなにすべてを知りたいんだろう」と語った。それに対して「すべてを知れば傷つくことだってある。私だったらすべてを知りたいとは思わない」、「そもそも『すべて』って何だろう?」、「戦争をやっている地域とか現状とか、世界中で起こっていることすべてってことじゃない?」と話し合いが続いた。私が「みんなは、坂田さんのようにすべてを知りたいって思う?」と問いかけると、すべてを知りたいと考えたのは40人中5人であった。すべてを知りたくない理由を問うと、「怖い」、「知らなくても問題はない」といった声が出た。

幸介は「じゃあ、なんで(作詞者の)坂田さんはすべてを知りたいと考えたのだろう」と、問いを深めていった。すると、貴弘が「みんなに平和を伝えたいからじゃないかな?」とつぶやく。「平和しか知らない人は平和を伝えられないし、戦争しか知らない人も平和を伝えられない。すべてを知っているからこそ平和を伝えられるのではないか。だからすべてを知りたいのだ。平和を伝えるために」。これが2組の子供たちが辿り着いた結論であった。

次に、「私が望めば本当にできる」について考えた。子供たちは「私はそう思わない。望んだって思い通りにならないことの方が多い」、「世界平和は究極的には無理だと思う。今だってテロとか起こっているんだから」と語り合った。この場で幸介は、少し語気を強めながら、「でも、少しずつならよくしていけるんじゃないかな」と発言している。

授業の振り返りとして、幸介は次のように綴っている。

- ・坂田さんの言う「平和」は絶対に来ないと思う。なぜなら人間には感情というものがあるから。そして、欲というものがあるから。人間はいつだってささいなことでケンカをする。傷つけあう。だけどそれは仕方のないこと。両者とも言い分があり、両者とも自分が手に入れたいという欲を持っているから。だから世界平和なんて実現しない。だけど、坂田さんの詩の意味で少しずつ平和にすることはできると思う。たとえ、100%平和にできなくても、99%平和にはできると思う。

音楽とことばの交響

それを実現していくのは僕たちだから、僕たちは望まなくてはいけない。平和を。

幸介の振り返りにある「だけど」は、『わたしが呼吸するとき』の歌詞にある「だけど」と重なっている。「僕たちは望まなくてはいけない。平和を」。その言葉は、「あなたが望めば本当になる 私が望めば本当にできる」という作詞者の思いに重なっている。

同日午後、校内音楽会に向けた最後の学年合唱の練習を行った。子供たちの歌声が明らかにこれまでと変わっていた。その日の学級通信に私は次のように綴っている。

最後のステージ練習。子どもたちの歌を聴きながら涙が溢れてきた。なぜ涙が出てくるのかわからないけれど、心が揺さぶられるような感覚だった。出だしから違った。「いらだち」と後の静寂した空気に鳥肌が立つようだった。今まで何度も聴いてきた『わたしが呼吸するとき』だけれど、涙が出たのは初めてだった。半年かけて創り上げてきた6年生の『わたしが呼吸するとき』。前日の練習ではあったけれど、心を揺さぶる力のある合唱になったことが嬉しかった。この日の合唱を私は忘れない。

私の涙は子供たちの「思い」が伝わってきた涙だと思う。その媒体は、子供たちの言葉や表情である。「なぜ歌うのか」、「どう歌うのか」、子供たちは一つの曲を歌い続け、これらの問いを考え続けてきた。その問いにどう応えるかという迷いが、前日までの合唱にはあったように思う。この日、幸介を初め子供たちは、そうした迷いから抜け出し、気持ちよく歌うことができたのである。

6. 分析と考察

本節では山浦・原・清水によって示された省察的記述に基づき、三人の記述に埋め込まれた実践的知見を、参与観察者である藤森が解釈的に分析・考察した内容を示す。

6.1. 学級文化

三つの省察の「語り」を6年における一つの「物語」として編み直すと、音楽会に向けた取り組みには、この学年が築いてきた学級文化を見ることができる。4年次から同じ学級編成で進級してきた6年各学級が2年半の時間をかけて醸成してきた文化とは、「行為の意味を問う」文化である。

例えば谷浜鍛錬会で教師と子供たちとが追究し探究してきた問いは、「泳ぐ」という行為が意味するものへの問いである。子供たちは自らプールで遠泳に挑み、教師はそれを見守りながら、「何のために泳ぐのか」、「泳ぐことには何の意味があるのか」という問いに正対していたのである。それは、全員で泳ぎ切る営みの中で、それぞれが個として自立するとはどういうことかへの問いに接続する。谷浜の海で泳ぐことができなかつたとき、それが単なる残念な事態で処理されずに済んだのは、このような本質的な問いがあったからと考えられる。子供たちは、これまでの日々と今の思いを文章化することによって振り返り、「行為の意味を問う」という行為の価値を見出している。海を見ながら25分間の作文に臨むという代替活動は、浜辺に出て心を慰めるといった安易な行為では得ることのできない学びの機会を提供している。

「行為の意味を問う」文化は、音楽会に向けた活動でも重層的に現れている。ここで効果的に作用したのが国語科として歌詞の意味を考える作業である。省察記録にあるように、当初、子供たちの多くは歌詞を楽曲の音に合わせて配列された「ただの言葉」としてしか捉えていない。だが、「行為の意味を問う」文化は、自分はこう歌いたい、ここで強弱をつけたいという主体的な創造活動を刺激する。これに応じて担任団と原は国語科の授業として歌詞を取り上げ、自分が心を込めて歌いたいフレーズを考える場を設定する。子供たちは歌詞に込められたメッセージを自ら問い直す機会を得、互いの考えを交流させる。この授業の次時、原は間髪を入れずに全員合唱の練習の場を設け、歌詞の意味

を問う学びを歌に乗せて確かめるという経験に繋げている。それによって、本質論的に追究した意味は、行為によって具体的・実感的に把握されることになる。

ところが、歌詞に対する認識を「曲に添えられた言葉」から「メッセージを持った言葉」へと変えた国語科の学びは、新たな問題を原と担任団に自覚させることになった。それは、歌詞の意味を問うだけでは本質的な「行為の意味」を問うことになっていないという問題である。この問題を解決するために、原と担任団は、第4曲にある『耳を澄ませば』を子供たちに聴かせる場を設けている。この試みは子供たちに衝撃と驚愕を与え、歌詞の冒頭部にある語り手の惑いや不安がどこから来ているのかを考える活動へと展開していく。この活動は、表層的には歌詞の意味をより深く理解するという学びとして行われつつ、深層部分では、『わたしが呼吸するとき』を全員で歌うという行為が「平和への祈り」であり、戦火の中で傷つき命を落としていった人々への鎮魂であり、そして不条理な出来事を乗り越えて共存しながら生き抜くことへの宣言でもあるという共通認識を獲得させている。そうして獲得した意味は、ここでもまた全員合唱という行為によって確かめられることとなる。

音楽会公演は、穏やかに、様々な「行為の意味」を内包して終わった。講評には、「歌詞に共感している」というコメントが寄せられた。子供たちが技術的な巧拙を越えてこの歌を歌うという行為そのものに意味を見出していたことが、鑑賞していた第三者にも通じた証左である。

6.2. 失敗・挫折と葛藤・省察

それでは、「行為の意味を問う」文化が醸成されていった諸活動には、どのような共通性があるのだろうか。この問いを立てたとき、いずれも何らかの失敗や挫折が存在し、それに対する葛藤と省察が生じていることに気づく。例えば谷浜鍛錬会では台風接近で泳げないという挫折があり、その代替活動として何をするのが最適かという葛藤をもたらしている。同様に、音楽会に向けた練習では、声が出ないという幸介の失敗を始めとして、合唱に積極的に参加したがいらない子供たち、歌に込められる思いの浅さなど、活動する上での躓きが幾度も発生している。そしてそのたびに生じる葛藤と省察が、「どのように歌いたいのか」という問いを「何のために歌うのか」という問いへと深化させていくのである。

上の知見に関連して、坂本(2016)は、教育実践場面における教師の自己内対話に着目し、熟練教師が何を契機に高度な専門性を発揮するのかについて、6か月間にわたるエスノグラフィー研究を通して考察している。坂本によれば、教師が当面する実践事実に対して自らの知見を総動員して省察する際には、教育実践場面で生じたある種の「葛藤」が存在している。この指摘を受けるならば、本実践における葛藤には、極めて重要な事実関係の存在が示唆される。

それは、本実践において、失敗・挫折がもたらす葛藤・省察は、子供たちのみならず、教師たちにも存在するという事実、更には作品にも存在するという事実である。教師たちは、彼ら自身が実践の波に揉まれつつ、時に溺れそうになりながら、「なぜこの歌を歌う必然性があるのか」という問いを自らに問い続けている。そして、子供たちと共に歌い、子供たちと共にこの歌に込められた語り手のメッセージに共感している。そうした姿を子供たちに晒すことがどのような教育的意味を持っていたのかについては、幸介の振り返りに示された以下の一文が端的に語っている。

「人前で歌えないという大きな失敗があったから大きな成長ができたのだ」。

6.3. 分化と統合の有機的・連続的展開

音楽科と国語科の教科間連携を試みる際、連携とは言いながら、単元の立て方によって学習者の問題関心がいずれかの教科内容に偏ってしまう傾向や、学習内容が要素主義的になってしまう事態が指摘されている(安中, 2011; 西田・今道, 2011)。これを踏まえると、音楽会での発表をテーマに据え

音楽とことばの交響

た本実践は、国語科の教科内容が音楽科のそれに吸収されてしまう事態が予想された。

しかしながら、3人の省察記録から示唆されるように、本実践においては学習指導要領に謳われる「各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴いて、声を合わせて歌うこと」という音楽科の指導内容も、「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること」という国語科の指導内容も前景化されていない。すなわち、音楽科の授業、国語科の授業という教科意識が、子供たちはもとより教師にも希薄なのである。彼らは必要に迫られて全員合唱の練習に臨み、歌詞の意味内容を話し合い、第4曲の『耳を澄ませば』に耳を傾けている。いわば、学びの「物語」という楽曲の演奏パートとして音楽科と国語科があり、即興的に産み出される旋律に沿って、それぞれの授業がそれぞれのタイミングに必要な音を奏でているのである。付言すれば、この演奏パートには社会科で学んだ戦争や、平和を祈ることへの倫理的な考察も参加している。

しかし、ここで注意したいのは、こうした営みの結果として、音楽科にあっては作品を表現する際の抑揚・強弱・休符・パートの調和などが学ばれ、国語科にあっては登場人物の心情・象徴性・そして主題が考察されていることである。全体で一つの楽曲を奏でることの意味はどこにあるのかという問いによって統合的に展開する学びは、一方ではそれぞれのパートが持つ機能に応じた学びを実現している。この、「分化と統合の有機的・連続的展開」こそ、真の総合学習と行うことができる。

このような実践事実を見ると、本実践独自のアプローチである、学びを貫くテーマを軸として教科間連携を図ることの意義が諒解されよう。音楽科と国語科が真に交響する要件は、両者が独立した所与の科目であるという前提を保留し、一つの目的において互いに繋がらざるを得ないテーマを持つことである。そしてそのテーマは、本実践に限って言えば、当該学年・学級の教師と子供たちとが歩んできた学びの歴史と、そこで醸成されてきた学級文化とによって見出されている。

ところで、本実践には音楽科と国語科の交響におけるもう一つの要件が示唆されている。それは、音楽会の作品として選択された合唱曲が持つ力への視点である。先述した「行為の意味を問う」文化は、6年にあっては当事者たちの失敗・挫折経験と共にある。音楽会の発表曲はここに接続し、なおかつ国語科の学びに耐え得るレトリックとメッセージが内包されている必要があった。この必要条件にとって、「わたしが呼吸するとき」は、既に述べた理由から最適な「材」であったと言えよう。しかも教師たちはこの作品を一方向的に与えるのではなく、他の候補作品と比較しながら子供たち自身に選ばせている。それによって子供たちには選択する自由が与えられ、当該作品に主体的に向かう姿勢が生まれている。そしてそれが様々な教育内容を総合させた活動へと結実していくのである。

7. 結語に換えて：展望

本実践報告では、当事者である複数の教師における実践の「語り」を一つの事実として提示し、そこから示唆される知見を解釈的に分析・考察する形式を選択した。長期にわたる探索的な実践研究であるため、仮説検証型の実験研究に求められる実証性と客観性は、本稿では顧慮されていない。今日、質的心理学研究や教育社会学では、このような記述形式が積極的に取り入れられる傾向にあるが、主観性を排除せずに妥当性と信頼性を保証するためには、今度さらなる方法論的検討が必要である。

また、本実践がなされた背景に長野小という学校が持つ伝統・文化があることは緒言で述べたが、このことは、本実践が実現した環境要因として、学校全体が経験主義的な教育観・児童観・学習観を持っていること、緊密で信頼関係に満ちた同僚性が維持されていることを示唆している。長野小は、大正時代よりデューイのいわゆる「為すことによって学ぶ」教育哲学を一貫して守り抜いてきた学校であり、今日なお、「共に在る」を学校目標に据えてその哲学を追究し続けている。また、同僚間の信

頼関係は極めて篤く、日常的に互恵的に関わっている。このような環境にない学校において、本実践で示した学びの「物語」を紡ぐことはいかにして可能であるか、難問として残されている。

最後に、今後への展望として二、三の課題を挙げ、結語とする。

課題1：他教科等との連携

前節で述べたように、音楽科と国語科の連携に着目した本実践報告だが、実践の過程では社会科、道徳教育など、様々な教科・活動と関連している。学年・学級の学びを貫くテーマを軸に据えた実践である以上、これは当然の結果と言えよう。したがって、今後に向けた実践開発の方向性として、他教科等との連携を視野に入れる必要がある。その中では教科の独自性に配慮すべきケースも想定され、学びの「物語」における各教科の分化と統合の在り方がより明確になろう。

課題2：ミクロレベルの分析

紙幅と実践期間の長さとの関係で、本実践報告では、授業記録とその微視的な分析を示すことができなかった。長期間の実践とは言っても、もとよりそれは平滑で一様な学びの連続ではなく、学びの行き詰まりや失敗、予想外の事件などが横溢した出来事の連続である。その中には、劇的な転回のもたらされる局面があり、そこにおいて子供たちは、あたかも生まれ変わったような発見や成長を見せることがある。そのような局面については「語り」の密度を上げ、ミクロレベルの分析を導入する必要がある。ただし問題は、そうした出来事といつどのように邂逅するかは誰にも予測が付かないことである。ゆえに実践研究それ自体は、広汎な実践事実を地道に集積するしか外に道はない。

課題3：追跡調査

6年の子供たちは2016年3月に卒業し、全員が中学校に進学する。彼らは基本的に隣接する附属長野中学校に進学することになるが、長野中学校にはまた独自の文化があり、長野小と異なる部分が少なくない。そうした新しい環境の中で、彼らが醸成してきた文化とこれまでの学びの歴史とが、どのように活かされ、あるいは否定され、修正され、更新されるのか。他の小学校からの新入生が1.5倍の人数で存在する環境下、あの音楽会で聴かせてくれた歌声をどのように響かせるのか。こうした点を追跡調査することによって、小学校生活という行為の真の意味が明らかになるであろう。

引用文献

- 安中陽子(2011)「音楽づくりにおける音と言葉のかかわり—国語科との関連を図った小学校音楽科の実践」、『音楽教育実践ジャーナル』, 8(2), pp. 46-53.
- 上谷順三郎・中地雅之(1998)「教員養成学部における国語科と音楽科の合同演習の試み—合科的アプローチによる「やまなし」(宮澤賢治)の理解と表現—」、『岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要』, 8, pp. 47-63.
- 鯨岡峻(2006)『エピソード記述入門』, 東京大学出版会.
- 坂本史織(2016)『教育実践場面における対人コミュニケーション能力の研究—教師の自己内対話に着目して—』, 信州大学大学院教育学研究科修士論文.
- 中地雅之(1995)「〈ことば〉の表現活動を通じた音楽科と国語科の合科的指導—日・奥学習指導要領の比較研究—」, 『岩手大学教育学部研究年報』, 54(2), pp. 143-152.
- 西田治・今道真名(2011)「五感で感じることを起点とした創作活動の実践—小学校における音楽科と国語科の連携」, 『音楽教育実践ジャーナル』, 8(2), pp. 116-127.
- 日吉武(2009)「音楽科教育における合唱指導の一試案—「詩のボクシング」を取り入れた歌詞指導—」, 『鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編』, 60, pp. 15-27.
- 山田丈美・都築繁幸(2015)「国語科と音楽科の合科的指導の試み」, 『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』, 16, pp. 79-89.
- ヴァン=マーネン, ジョン. (1999)『フィールドワークの物語—エスノグラフィーの文章作法』森川渉訳, 現代書館.

(2016年 2月25日 受付)

(2016年 3月24日 受理)